

「縁起」の倫理学は可能か：仏教的生命倫理学の原理をめぐって

前川 健一

一、はじめに

近年、仏教の立場から生命倫理を論じる人々の中で、縁起の思想が注目されている¹。そうした論考の中では、縁起は相互依存と解され、「他者との相互関係」²・「周囲の人々とのつながり」³などを示すものとされる。こうした縁起の思想は、個人の自律を前提とするアメリカ流のバイオエシックスを補完し、あるいは乗り越えるものとも言われている。

しかし、筆者は、このような縁起の理解には極めて懐疑的である。と同時に、仮に縁起を相互依存と解したとしても、生命倫理学における有効性については、検討すべき余地があると思う。そこで、まず縁起の語義について検討し、ついで相互依存という原理に含まれる問題点について考察したいと思う。

二、「縁起」は相互依存か？

縁起は、文字どおり、何かを縁として別の何かが起こることを意味する⁴。縁起の趣旨を要約した「これある時、かれあり。これ生ずる時、かれ生ず」「これなき時、かれなし。これ滅する時、かれ滅す」⁵という有名な句があるが、これを見ても、縁起の本質が一種の因果関係であることが分かる⁶。そして、この句の中では、「これ」が原因、「かれ」が結果であり、決して「これ」と「かれ」の逆転は見られない。つまり、縁起の基本は、原因から結果へという一方的な関係であり、相互依存ではないのである。

縁起が重視される一因は、釈尊が悟りを開いた時、その悟りの内容は縁起であったとの仏伝があるためであるが⁷、そこで釈尊が悟ったとされるのは十二因縁（十二の項目から成る縁起）であり、無明から老死にいたる因果関係である⁸。ここには、何ら相互依存は含ま

1 たとえば、鍋島直樹『親鸞の生命観：縁起の生命倫理学』（京都・法藏館、2007年5月）、木村文輝『生死の仏教学：「人間の尊厳」とその応用』（京都・法藏館、2007年4月）など。鍋島教授がセンター長を務める龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターが刊行している「人間・科学・宗教ORC叢書」（京都・法藏館）でも、この立場からの論稿が多数見られる。

2 木村著 104頁。

3 木村著 119頁。

4 もう少し厳密に言えば、「縁って起こること」。パーリ語 pañiccasamuppāda、梵語 pratīyasamutpāda。

5 たとえば、『雑阿含経』卷十「此有故彼有。此生故彼生」（大正新脩大藏経2-67a5）「此無故彼無。此滅故彼滅（同上6~7）。

6 三枝充恵教授によれば、この句は十二因縁説が形成される過程で、その趣旨を要約するものとして生まれたものとされる。同著『初期仏教の思想（下）』（東京・第三文明社、1995年3月[初刊 東京・第三文明社、1978年7月]）732~733頁。

7 『律蔵』「小品」など。

8 原因の方から記すと、無明→行→識→名色→六入→触→受→愛→取→有→生→老死。

れていない。

もっとも、縁起説は十二因縁だけではなく、さまざまな縁起説が説かれている。その中で、老死から識にいたる十支縁起⁹では識と名色との相互依存が説かれている。しかし、それを縁起の基本的意味とするのは無理であろう。

一方、「龍樹の中観派になると、縁起が相依相関性の意義をもっていることが明示されるようになる」¹⁰と言われることもある。しかし、これも誤解を招く表現である。龍樹が縁起を重視したことは事実だが、彼の主著である『中論』において説かれる縁起は、伝統的な十二因縁であって、相依相関性のことを説いているわけではない。『中論』の中に相互依存が説かれているのは事実だが、それは縁起とは関係がない。しかも、その相互依存は、「他者とのつながり」といった積極的な原理たりうるものではない。それは、一切のものに実体がないことを示すため、「薪と火とは相互に依存しているので、どちらも実体として存在しない」というように、否定的な論証のために用いられているのであり、それ自体が積極的な原理として主張されているわけではない¹¹。江島恵教教授は、縁起の語義解釈においてという限定を付しながら、縁起に相互性という意味を読み込むのは7世紀のチャンドラキールティが初めてであることを示している¹²。

このように見てくると、明確に縁起という語と相互依存とを結びつけるのは、中国の華嚴宗を待たねばならない。もっとも、華嚴宗においても、縁起がただちに相互依存なのではない。華嚴宗で言う縁起とは、別の言葉で言えば「随縁」のことであり、真如に依存して様々な現象（諸法）が成立することである¹³。そして、そのような諸法および真如との間ないし諸法相互の間に一種の相互依存が成立するということであって、華嚴宗においても縁起と相互依存とはイコールなのではない。

以上、述べてきたのは思想史的には周知のことに属するが、それにもかかわらず、縁起イコール相互依存という理解は根強い。そこには幾つかの要因が考えられる。

⁹ 識←→名色→六入→触→受→愛→取→有→生→老死。六入を除いた九支縁起もあり、そこでも識と名色の相互依存が説かれる。

¹⁰ 鍋島著 63 頁。

¹¹ 「もしも薪に依存して火 [が有り]、火に依存して薪 [が有る] のであるならば、どちらが先に成立していて、それに依存して、火 [が有り]、[あるいは] 薪 [が有る] のか」(観燃可燃品第十・第八偈)、三枝充恵訳注『中論(中)』(東京・第三文明社、1984年3月) 321 頁。なお、ここで「依存して」と訳されているのは *apekṣya* で、縁起とは関係ない。

¹² 江島『『中論』解釈書における「縁起」の語義解釈』、『仏教思想の諸問題(平川彰博士古稀記念論集)』(東京・春秋社、1985年6月)。なお、下記における斎藤明教授の発言も参照、「日本印度学仏教学会パネル発表「現代人の「いのち」と仏教」報告 コメントならびに質疑応答」、『愛知学院大学禅研究所紀要』37号、2008年3月、331頁。

¹³ 華嚴宗の成立に大きな影響を与えた浄影寺慧遠は次のように述べている。「清浄法界如来蔵体、縁起造作生死涅槃」(『大乘義章』卷一、大正新脩大蔵経 44-483c19~20)。ここの「縁起」は、「清浄法界如来蔵体」に依拠して「生死涅槃」が成立することであり、通常の仏教用語では真如随縁にあたる。言葉は同じでも、無明を出発点とする本来の縁起とは、意味内容も構造も大きく異なっている。

一つには、最後に述べたような華嚴教学における縁起を、無意識に初期仏教などの縁起に投影させているためである。そのため、最初から縁起を相互依存と考え、その枠組みで様々な資料を解釈してしまうことになる。先にふれた「これある時、かれあり」云々の句も、「これ」と「かれ」の関係に注目すれば単純な因果関係であることは自明であるにもかかわらず、論者によっては相互依存を示すものと解釈されることになる。

二つ目には、戦前の仏教学界に大きな影響を与えた宇井伯寿教授の縁起解釈である¹⁴。宇井説では、縁起は通時的な発生論的關係ではなく、共時的な論理的関係であると解釈する。さらに、識と名色との相互依存を重視して、これを十二因縁全体に及ぼし、縁起を相依相関の意であると主張するのである。しかし、三枝充恵教授の言うとおりに、これは「行きすぎ」である。共時的な論理的関係であると解しても、「AによってB」という論理的な順序は存在し、ただちに相互依存ということにはならない。

三つ目は、宇井説に関連して、縁起の趣旨を要約する *idappaccayatā* (パーリ語。梵語 *ida□pratyayatā*) という語を、宇井教授が「相依性」と訳したことが挙げられる。しかし、*idappaccayatā* は文字通りには「これに縁ること」の意で、相互性は全く含意されていない。「相依性」という訳語には、自説からの過度な読み込みがあったと考えざるを得ないが、この訳語が広く使用され、さらには本来の文脈を離れて使用されることによって、縁起＝相互依存という理解が定着したと考えられる¹⁵。

さらに、筆者が素朴に疑問に思うのは、縁起は基本的に苦悩の由来・原因を説き明かすものである。十二因縁であれば、苦悩(老死)の原因を尋ねて、最終的に無明に到ることを示した後、無明の滅から始まって、老死の滅にいたる因果関係を示すのが常である。つまり、仏教徒にとって、縁起の総体は本来的に克服されるべきものであって、積極的な原理になるというようなものではないのではなかろうか。もし仮に縁起を相互依存と解釈しても、それは苦悩の世界のあり方であって、それから離脱することが求められることになりはしないだろうか。少なくとも、初期仏典の範囲で考えるなら、そこから積極的な倫理原則を導き出すことは無理であるし、龍樹的な意味での相互依存でも同様である。「私たち

¹⁴ 「十二因縁の解釈：縁起説の意義」、同著『印度哲学研究 第二』(東京・岩波書店、1965年8月[初刊 東京・甲子社書房、1925年6月])。同「縁起説の発達と変遷」、同著『仏教思想研究』(東京・岩波書店、1943年1月)。和辻哲郎『原始仏教の実践哲学』(東京・岩波書店、1927年)は、宇井説を批判的に継承しており、一般には和辻を通じて「縁起＝相互依存」という解釈が普及していったと考えられる。

¹⁵ 木村文輝教授は、縁起＝相互依存と解釈することについて、文献学的な問題点があることを認めた上で、そのような解釈は「日本的な「生活仏教」のそれにもとづく」と述べている(木村「リビング・ウィルの射程：自己決定権の「自己」とは誰か」、『愛知学院大学禅研究所紀要』37号、2008年3月、279頁)。しかし、縁起＝相互依存という解釈は、近代の仏教学の中で発生し、広まっていったもので、「生活仏教」とは無関係であると考えた方が良いと思われる。「寺社縁起」「縁起が悪い」など日常化した表現でも、「由来」「ことの起こり」など縁起という語の基本的な意味は保持されており、相互性は含意されていない。

の誰もが縁起のネットワークの中心に位置しており、その中の主人公として生きている」¹⁶ 「相互につながっているという一体感」¹⁷といった縁起のとらえ方は、華嚴教学における縁起を前提にしなければ意味をなさないものであると思う。少なくともそれを通仏教的な縁起の思想と呼ぶことは出来ないであろう。

一方、華嚴教学における縁起と限定した場合、歴史的に見て、それが全体主義や国家主義と極めて親和性が高かったことを指摘しなければならない¹⁸。華嚴教学における縁起は、真如という包括的な真理に依拠して成り立つ。「一即多、多即一」という有名なキャッチフレーズに代表されるように、相互依存する諸現象は一なる全体へと包括される傾向がある。これが、戦前期においては、天皇への滅私奉公を仏教的に基礎づけるレトリックとして愛用されたのである。一例として、昭和19年に『縁起の構造』を著した亀川教信の場合を挙げてみよう。彼は、同書の中で次のように述べている。「われも（原文闕字）陛下の赤子である。かれも亦おほみたからである。さういふ因縁に結ばれてこそ、われの存在は彼に依り、彼の失敗はわれの責任にありとする縁起観が成り立つ」¹⁹。また、「一切のものゝ互に資けられて成り立ち互に相依つて在るといへる関係性」の究極に無我の境地があり、「すべてのものが公のもの国家のものに没入せしめられる」と説く²⁰。このようなレトリックは、縁起思想の本旨とは違うと言われるかも知れないし、筆者自身もそう思う。しかし、では、このような全体主義的な論理に陥らないためには何が必要なのか、ということは問われねばならないであろう。

以上、少なくとも仏教の歴史的展開を考慮した場合、縁起＝相互依存という解釈には検討すべき余地が多々あることを示したつもりである。もちろん、我々が用いる「縁起」が、初期仏教における「縁起」の用法と同一である必要はない。当然、様々な意味の展開はあって当然であるし、時として、新しい意味を読み込むことも必要な場合もある。しかし、それは本来の意味を踏まえての上での展開であるべきであろう。そうでなければ、ただ単に誤解を拡大するだけに過ぎず、自らの思い込みを強弁することにもなりかねない。少なくとも現代における「縁起」の用法には、その傾向が顕著であると感じられる。

三、相互依存と倫理

縁起そのものの解釈とは独立に、相互依存ということが一般に倫理にとって如何なる意義を持つかを考えてみたい。

相互依存は、現に今存在している種々のものの中で恒常的に起こっていることである。私の存在が何らかの意味で私以外の人々や物事に依拠していることは間違いない。しかし、

¹⁶ 木村論文 275 頁。

¹⁷ 鍋島「縁起思想の生命倫理学」、『愛知学院大学禅研究所紀要』37号、2008年3月、287頁。

¹⁸ 石井公成教授の一連の研究を参照されたい。

¹⁹ 亀川『縁起の構造』（京都・全人社、1944年8月）578頁。

²⁰ 亀川 614～615 頁。

単にそれだけでは如何なる倫理的判断をも導き出すことができない。というのは、Aという状態でも、Bという状態でも、相互依存自体は恒常的に起こっているのであるから、Aという状態における相互依存とBという状態における相互依存とを比較するためには、相互依存以外の観点が必要である。たとえば、奴隷と主人との間にも相互依存はあるし、対等の友人同士にも相互依存はある。あるいは、二国間の自由貿易も相互依存であるが、植民地と宗主国との関係も相互依存である。或る相互依存の仕方より、別の相互依存の仕方の方が良い、というためには、相互依存以外の観点が必要である。

相互依存ということから共存共栄といったイメージを描く場合が多いが、相互依存そのものはそのようなことを含意しない。そこには、個の独立や自律といった、必ずしも相互依存とは関係のない概念が密輸入されている。もちろん、個の独立・自律を前提として、そうした個と個との間に相互依存が成り立つと考えても良いわけであるが、それであれば西洋的な「正義」の観念で十分カバーできるものであり、わざわざ相互依存を強調する必要もなく、それを「縁起」と呼ぶ必要すらないように思われる。

また、相互依存は現に存在している全ての事象の間で成立していると考えられる。その広がりとは本質的に無限である。しかし、このような考え方が意味することは、私の行為や存在が他者に対してどのような影響を及ぼしているかを、私自身が完全に把握することは不可能だということでもある。私が良かれと思った行為が、どのような仕方でも自分の視野の外にいる他人に害を与えているかは分からない。逆に、自分がなした悪事が、めぐりめぐって、誰かに利益を与えているかも知れない。相互依存の無限の広がりを文字どおりに受け止めれば、むしろ通常の意味での倫理そのものが成り立たないのではなからうか。つまり、相互依存という原理を現実的な倫理原則として活用するためには、相互依存の総体を何らかの形で限定する必要がある。どの範囲における相互依存なのかを確定しない限り、行為の結果を見通すことも、その責任を取ることも出来ない。先に引用したように、戦前の縁起のレトリックにおいては、相互依存の総体は国家と同一視された（あるいは、国民は国家を媒介としてのみ他国・世界と関わりとを考えられた）。そこに一つの問題があることは確かであるが、かと言って、漠然と全世界と言ってみたところで、具体的な行為を成立させるものとはならない。相互依存を原理とするなら、どのような範囲で相互依存を言うのかが問われる必要があると思う。

「お互い様」とか「持ちつ持たれつ」といったことは、我々の多くにとってごく当たり前の感覚である。その意味では、相互依存が、我々の倫理の基礎にあることは間違いない。しかし、そうしたレベルを超えて、万物の相互依存といった点まで主張するとすると、そこには少なからぬ難点が出てくる。縁起＝相互依存を主張する論者が、他者との共生を志向する誠実な意図を有していることは疑いないが、そのための道具として縁起ないし相互依存という概念が十分に機能するのか、筆者には少なからず疑問である。

四、むすび

キリスト教の神学者たちが、アメリカの生命倫理学の形成にあたって、大きな影響を与えたことは周知の事実である。また、今日でも、生命倫理学の問題は、キリスト教神学者にとっては大きな問題であるし、一般の人々に与える影響も大きい。

唯一神ヤハウェの律法という或る種の社会規範を前提とするキリスト教（やユダヤ教・イスラーム）にとって、現世の秩序・倫理は極めて大きな関心事である。しかも、ヤハウェの言葉という絶対的な規範があり、それをどのように現実に対応するかという明確な方法論がある。

日本仏教に視野を限定して見れば、生命倫理問題への発言の多くが、方法論的な意識をはなはだしく欠いていたことを率直に認めざるを得ない。全てが全てではないにしても、仏典からの断章取義と、気ままな感想があまりにも多かった。「縁起」をキーワードとする近年の論著は、こうした状況に対して、「縁起＝相互依存」という一つの原理を設定するもので、注目に値するものを含んでいるが、本稿で検討したように、原理の選定や解釈そのものに重大な問題をはらんでいると言わざるを得ない。

仏教的生命倫理学はそもそも必要なのか、そもそも仏教がキリスト教と同じように生命倫理を語らねばならないのか否か、こういう地点から十分に考え直す必要があると筆者は考えている。宗教は倫理の補完物や、倫理の監視人ではない。とりわけ、輪廻の終結すなわち涅槃を仏教の根本目的と考える限り、仏教にとって世俗における倫理は二義的なものとならざるを得ない。世俗的な善行をいくら積み重ねても、涅槃をもたらすことは出来ないからである。縁起＝相互依存という図式が重宝されるのは、そもそも仏教の中に他者との関わりを肯定的に位置づける論理が欠けているからだという見方も出来よう。そのように考えるなら、具体的な倫理を直接指示することは、必ずしも仏教の守備範囲ではないとも言える。

仏教と生命倫理との関わりで、西洋人から見て大きな関心の的となっているのは水子供養である。そこには西洋人の側の「幸福な誤解」とでも言ったものがないわけではないが、倫理的な事柄について、倫理とは別の次元で語ることと解するなら、そこには仏教と生命倫理との関わり方について示唆するところがあると思う²¹。妊娠中絶が合法か否か、倫理的か否か、とは別の次元で、そこには苦しみや悔恨がある。仏教の立場からすれば、そのような「苦」こそが本質的な問題のはずである。今現在行われている水子供養が直ちにそうだというわけではないが、ともかくもそうした「苦」に照準を当てた行為として水子供養は理解することが出来る。もちろん、そうした関わり方は、仏教以外の宗教でも可能であるし、いわゆる「供養」という儀礼が仏教にとって本来的なものであるかも問題では

²¹ 拙稿「水子供養の倫理は超えられるか? : 生命倫理と仏教」、末木文美士編『現代と仏教：いま、仏教が問うもの、問われるもの』、東京・佼成出版社、2006年12月。

（本稿は、日本宗教学会第68回学術大会での発表〈2010年9月13日、京都大学〉を補記したものです）

あるが、「一切皆苦」が仏教の根本的立場であるなら、こうした関わりの仕方こそが、仏教にとっても、生命倫理にとっても生産的なものなのではないかと思うのである。

(まえがわ・けんいち、日本仏教思想史)